

## 特別賞

### 森や木の必要性

青山中学校 大上 泰

僕は、都会のど真ん中に住んでいる。道を隔てた向こう側には、高さ二百メートルを超えるビルが立っているし、あるのは人混みだけだ。森の中では鳥の美しいさえずりが聞こえるのだろうが、ここで聞こえるのは、うっとうしいカラスの鳴き声だけである。山の中の大きなオニヤンマなど見られず、人に害を及ぼすだけの蚊ばかりを見かける。風も、森の中を吹き抜ける涼しい風ではなく、室外機からの熱風しか感じるができない。また、落ち葉フカフカで、歩いていて気持ち良いはずの地面も、舗装され固く、さらに夏には、日の光を受けとても熱い。

このような都会暮らしをしている僕だが、年に数回、山の中にある祖母の別荘に行く。その丸太でできた家では、都会では味わうことができない、とても楽しい体験をすることができると。

森の中を散歩しながら鳥の鳴き声を聞いたり、夜には星空を見たりといった時間を過ごす。テレビは映らないが、苦にはならない。むしろ、いらぬと思ってしまうほどだ。好きなテレビ番組の時間を待つことより、自然の音を聞き

ながら、次の日は何をしようかと考えることの方がワクワクする。

冬は暖炉に火を入れる。別荘の周りから薪を拾って来て、暖炉の中に入れる。そして、火をつけるのだが、この時、なかなか火がつかない。そこで、松ぼっくりや、松葉を入れるのだ。これらはとても燃えやすく、昔から火をつけるときによく使うと、祖母から聞いた。同じ松ぼっくりでも、大きく開いた松ぼっくりの方が、火がつきやすい。火をつけるのは僕の仕事だ。昔から僕らは森や木の恩恵を受け生活していたのだ。このように、都会では味わえない体験が、感動を与えてくれる。

また、時には恐ろしい体験もする。嵐が来ると、森は狂ったようになり、ズザッと、すさまじい音をたてる。この時僕は、恐怖を感じた。翌日、見ると、家の周りの大木の枝は折れ、幹にぶら下がったり、地面に落ちたりしている。木が家を守ってくれたね、と祖母は言った。

自然の、この余りあるぐらいのすごさは、そう簡単には表現できない。

今、僕たちは、森林破壊など、自らその恩恵を拒絶するような行動をとっている。それらの行動は、時には洪水やがけ崩れなどの災害も引き起こし、たくさん被害を出している。それは、自業自得とも言える。災害に見舞われても、尚、人間は森林破壊を進めるのだろうか。そこを深く考えていかなければならないと思う。

森は僕にとって、心が落ち着くところや、守ってくれる

所だ。みんなにとつても同じはずだ。大切に、大切にしていきたい。